

漂着した魚たたき棒

さかな

今年は漂着するコハクが多く、せつせと石狩浜通いをしています。ところが5月中旬、コハクではなく「魚たたき棒※」を発見して飛び上がるほど驚きました。ちょうど今年から「魚たたき棒」を調べているところで、偶然の一致とはいえ背筋がゾクリとしました。発見場所は、はまなすの丘公園のあずまやから海へ向かう遊歩道先の浜辺です(写真1)。

棒の名前の「魚」とはサケマスのこと、獲れたサケマスの頭をたたき殺すために使います。この棒は北海道に限らず東北地方にも存在し、東北地方では今も使っているところがあります。実はこの棒の研究はアイヌ文化を除き、それほど進んでいません(写真2)。

魚たたき棒を見つけた浜は普段から流木が多く漂着するところで、この棒も石狩川から流れてきたとみられます。長さ46cm、最大径3.5cm。刃物で柄を削りだした野球のバット形をしています(写真3)。先端近くには微かですが、打撃の痕跡(使用痕)があり、実際使用されていたものであることが分かります。この形のたたき棒は紅葉山49号遺跡にもあり、これが最も古い例です(図)。

発見された棒の風化は中まで進んでいないので、何千年も昔のものではありません。おそらく、盛んに川でサケ漁が行われた江戸時代から

石狩川のサケ漁が終わる昭和35(1960)年までの間、使用痕があるので使っていたものが何らかの理由で流失したのでしょう。調査を進めていますが、北海道では魚たたき棒がいつまで・誰が使用していたかなどの基本情報は、すでに述べたようにアイヌ文化を除き記録に乏しいのです。今回の発見は石狩市らしい漂着物ともいえますが、魚たたき棒の形式や使用実態を研究する上で貴重な資料です。

(石橋孝夫)

※この種の棒の呼び名はほかに「鮭たたき棒」「なすち棒」など。東北ではエビス棒などの呼び名がある。



写真1 魚たたき棒の発見場所とたたき棒

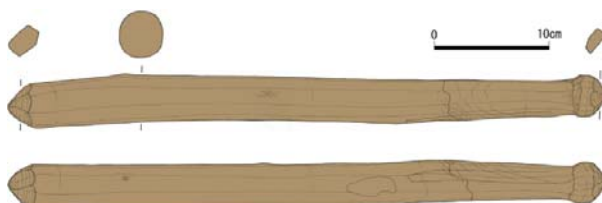
写真2 アイヌ文化の魚たたき棒 イサバキニ
(いしかり砂丘の風資料館蔵)

図 紅葉山49号遺跡の魚たたき棒(長さ51.5cm、最大径4cm)



写真3 漂着した魚たたき棒

石狩市学芸協力員
石橋孝夫 Takao Ishibashi

専門分野は考古学と石狩史。石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけたほか、縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法や文化について研究する。

間文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711

ERIS 「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ(<http://www.i-eris.tv/>)でもご覧いただけます。